

令和4年神奈川県議会第1回定例会 共生社会推進特別委員会

令和4年3月10日

鈴木委員

私は、午前中からの質疑を聞いていて、二、三点お話をさせてください。県立施設の身体拘束や、また虐待防止の取組について大変熱心に取り組んでくださり、感謝申し上げたいというふうに思います。ただ私、質疑を聞いていて、頑張っています、またコミュニケーションを取ります、いろんな話は出てくるけれども、ではどうしたらいいのというのが現場の職員の方の声だと思いますよ。これは企業なんかに例えちゃ失礼ですけれども、それを県側であるきちんとした管理者が、こうすべきであるという結論というのを出さないで、どんなにコミュニケーションを取つたって、それは出てくる答えというのはもう妄談としたことだと私は逆に思うんです。この中でもって見た感じで、リスクマネジメント、組織マネジメント、そしてコミュニケーションがかなり厳しいと、3分野ぐらい大体聞いていて私は思った。ところが、3点、これはよく考えてみると、あなた方は、科学的見地、ある意味ではDXとかという難しい言葉は別として、そういうものを入れて対応しないと。例えば、人数が少ないと先ほど県立障害者施設指導担当課長さんも言っていたよね。人数が少ない中でもって小さいセクションでやっている。失礼ですけれども、これは何かのリスクがどんと起つた場合というのは、例えば、そういう事件がその場で起つたら、この人はどうするのかな。相対している支援される側とする側はどのような形になりますか。

県立障害者施設指導担当課長

委員からお話のありました支援現場で、例えば、虐待までいかないにしても何かしら事故とかが起きた場合、一番大切なのは、その支援に当たっている職員の主観的な記憶みたいなところではなくて、客観的な事実に基づいて振り返っていくことが大変重要だと考えております。そのため、県立施設では今、見守りカメラというものを導入して、支援現場、共有スペースをカメラで記録するようにしております、何かしらそういった原因不明のけがなどがあった場合には、原因究明に対して、そういう客観的な事実に基づいて振り返る、こういった取組をしているところでございます。

鈴木委員

そういう答弁もありがたいことだけれども、実質的にはプライバシーという問題があるって、カメラが入れないところもあった中で事故があったというのも私はあると思うんですよ。それよりも、実質的にそういうことがあったときに誰かが駆けつけられるような、例えば、インカムみたいなものというのがクラウドでもって造作なくできるのに、失礼ですが、私がこの前伺ったところでは、そういうような形では見えなかった。例えば、それがクラウド上でもってできていれば、インカムは、ある意味ではイベントをやるときに誰でもどこのところでもみんな持っていますよ。そういうこともやっていない中で、きちんとしたそういう科学的な見地、こういうようなことをやればこういうものが少なくなるし、皆さんのがワーカロードが減りますよとかというものがきちんと示され

ない限り、結論をこうするというような科学的見地を持っていかない限り、失礼ですけれども、県が行ってあなたがどんなに一生懸命それを語ったって、どんなにいろんなことを言ってみても、全然 100%とは言いませんよ。御努力に私は感謝を申し上げるけれども、それに対してはそういう一つの科学的見地、そしてまたある意味では DX と、それこそ黒岩知事だって年がら年中言っているんだから、それをまずそういうところでもって、入れるような御努力を頂きたいと思いますが、いかがですか。

障害サービス課長

国が以前に調査した結果によりますと、虐待の発生要因ですとかというのは、やはりこの感情コントロールの問題ですとか職員の技術の問題、またやっぱり人員不足みたいなところも要因として挙げられております。今、委員がおっしゃられるような DX だとか、いろんな I C T 、ロボットの活用というのは、そういう問題も解決する可能性がすごく高いものがあるんだと思います。一方で、介護分野を私も見て、特養なんかも見させていただいたりとか、あと病院の事例なんかも見させていただいて、いろんなものが入っていてすごくそういったところに役立っているというのを実感しているんですが、今、障害の分野で、我々も何が有効なのか分かっていないというのが正直なところでございます。ただ一方で、インカムというのは本当に簡単に入れられるものだと思っています。ちょうど今、うちの担当課長も現場に行って、若手との意見交換なんかも始めていますので、やはり現場の方の意見をしっかりと伺って、何がそういったことで有効なのかというのを、意見交換なんかを始めさせていただければと考えているところでございます。

鈴木委員

大変難しいことで、私も今、インカムの話をして、やっぱり当たっていたんだなと思っていました。そんな小難しい DX がどうのこうのなんていうようなことは言いたくないので、科学的見地でというもので、少しでも人員やさつき言った 3 つのリスク、また、足りないものも、そういうことで補うような形を出して差し上げないと、これはまずいんじゃないのという中で私はお話をさせていただいた。同時に、これはちょっとと言葉に気をつけて言わなきやいけないと思いますが、例えば、御当人に関するいろんな資料等々もお持ちだと思うんです。これに対するやっぱり科学的な根拠を持ってしっかりと支援をしていく。今の時代はよく DX とか何とかと小難しいことを言う人はいっぱいいるけれども、要はデータの時代なんですよ。データは絶対どこかでうそをつかない。私はもういろいろ見てきましたけれども、それをどのように活用していくのかというノウハウを、ある意味で、あなた方がしっかりとそういうマネジメント能力というのを持っていないと、繰り返すようだけれども、頑張ります、またこうやってやっていますなんていうのを何回聞いたって、これが、現場の方々がどうすればいいのかというものにたどり着く一つ一つの手法であることは、私は否定しませんが、それをやっぱり見ていくためには、支援される側、入所者の方々も、そういう一つの科学的な根拠を持った形での対応というようなものについても、一歩踏み出していただきたいと思いますが、いかがですか。

障害サービス課長

委員がおっしゃるように、現場ではもう毎日のように日々の記録があって、記録を見ますとかなり蓄積しているはずなんですね。ところが、それが蓄積されたデータとして何かに活用されているかというと、正直に申しますとまだ全然生かされていない。やはり個人個人で書くレベルも違つてしまったりとか、視点が違つてしまったり、いろんな問題もあり、AIですとかそういったものもいろいろと出てきている中で、それを現場にどうやって融合させるのかを我々も研究してみたいと考えております。

鈴木委員

頑張ってください。取りあえず、本当にデータに基づく何らかの対応というのはよろしくお願い申し上げたいと思います。

もう1つは、頂いた委員会資料の21ページに障害者スポーツのところがありますが、おかげさまで、神奈川県障がい者スポーツ協会を提言させていただき立ち上げていただきました。ありがとうございます。御努力に心より感謝を申し上げたい。順調に進んでいるようなので私もすごく感謝を申し上げて、また今年も予算をつけていただいたようですので、ありがとうございます。

その中で、二、三点だけ、提言もひっくるめた形でお聞きしたいんですが、この障害者スポーツの中で、特にこの21ページにある、精神障がい者スポーツ体験会のピアスポーツかながわなんですけれども、この精神障害者スポーツということについて、ボーリングと、あとバレーボールという形で、隣のページに神奈川県精神障害者スポーツ大会、要はこれをピアスポーツかながわと言うのだと思うんだけれども、この中で、ある意味では、参加者が48人とか57人とかすごく少ない。この精神障害者の方々に対するスポーツの広報というのは、どんな形でやっていらっしゃるんですか。もちろんホームページは分かれますので、それ以外は。

スポーツ課長

精神障害者スポーツ大会につきましては、全国障害者スポーツ大会の予選会という位置づけもございまして、種目のほうはバレーボール等を設定させていただいております。それと今、御指摘もありましたピアスポーツかながわ、こちらのほうは障害者スポーツの体験会という形を取っております。精神障害者の方プラス健常者の方にも御参加いただけ、どなたでも参加していただける体験会という形を取っておりますけれども、実際には、来ていただいた方に並んで待っていただかなくて体験していただけるといったところもございますので、非常に盛況であったというふうには認識しております。

ただ、実際問題としては、もっとより多くの方に体験していただいて、精神障害とか、あるいはパラスポーツ全体に対する理解をしていただきたいというふうに考えております。現状では御指摘のように、ホームページ等で広報はさせていただいているところでございますが、今、障がい者スポーツ協会のほうもやっと2年たちまして、運営もこのコロナ禍もありまして大分中止になってしまったイベント等もあるんですけども、そういうところを通じまして、特に市町村のほうに広報させていただきながら、参加者については今後さらに

増えていくように取り組んでまいりたいというふうに考えております。
鈴木委員

その中で、課長さん、私は1つ疑問があるんだけれど、横浜なんかは横浜ラポールという障害者のスポーツ施設があって、コアなものを持っていらっしゃる。川崎、相模原、また県西部というのは、あまりそういうような感じでは拝見しないんですけども、この神奈川県のスポーツ協会として、逆にこの川崎、相模原、そして今、政令市もひっくるめた神奈川県全体としての、こういう一つ一つの広報の在り方というようなものは検討される機会というのはあるんですか。

スポーツ課長

今、御指摘がございました横浜にあります障害者専用のスポーツ施設、横浜ラポールでございますけれども、こちらのほうは社会福祉法人の横浜市リハビリテーション事業団のほうが運営をしているというふうに承知をしております。また、県内では政令市で申し上げますと、川崎市には障害者スポーツ協会がございます。あと、相模原市には、やはり専用のけやき体育館という施設がございまして、こちらのほうは、同じく社会福祉法人の相模原市社会福祉協議会といったところが運営をしているというふうに承知しております。現在、こういった政令市の皆さんと、例えば、障がい者スポーツ協会が実施しております大会の実行委員会の委員に入っていただいたり、若干の連携はございますけれども、御指摘のように、今後こうしたところと積極的に関わりを持ちながら、県全体としてどういうふうに障害者スポーツを推進していくのかといったところについても、意見交換をさせていただければというふうに考えております。

実際の障がい者スポーツ協会の専務理事に、この間お会いしたときにお話を聞いておりますが、相模原市は、具体的にはこの障がい者スポーツ協会はないんですけども、相模原市のスポーツ協会さんのほうとお話をさせていただいて、障害者スポーツについても今後連携して推進していきましょうといったようなお話があったというふうに伺っておりますので、今後そういう取組を含めて、県の障がい者スポーツ協会と足並みをそろえまして、県内の各市町村、政令市も含めていろいろと情報交換等を図っていければというふうに考えております。

鈴木委員

情報交換の場はすごく大事だと思うし、私は何でこういうふうに突然、県全体の在り方と言ったのかというと、やはりここに出てきているいろんなイベントを見ても、みんなやっぱり神奈川県の善行にあるスポーツセンター、県の施設が全部中心なんですよ。これというのはいかがなものかなというふうに逆に私は思っていて、どうせ広がりをこうやって持たせていただいて、また動きをつくっていただくのであるならば、県としての障害者スポーツという推進という観点から、もっといろんなところが私は出てきてもいいと。ただ、善行にあるのであれば、逆にやっぱりもっと西のほうの方々が来るのにも、結構交通の便としてはなかなか厳しいものがありますよね。そういう中で、一つ一つ、当然指導者の育成もあるんだとは思いますが、これだけもうオリパラ等々でもつて、大変に盛り上がっている状況下の中であるならば、今こそ私は逆にチャン

スだと。確かにコロナ禍というのはありますよ。あるけれども、広げていく大きなチャンスを逆に逃さないかと。こういうときだからこそ逆に、神奈川県下に散っていくべきだというふうに思っています。それだけ御要望しておきたいと思います。

あわせて、このページの中で1つだけ違和感があったのは、この24ページの障がい者アスリートの支援なんですよ。私は、それが悪いと言っているんじゃないんです。この障害者のアスリートの支援をしてくださるのであるならば、この方たちが積極的にこの障害者スポーツのところに来ていただくと。メダルを取ったり、またある意味では入賞されたり、そういう方が目の前でもって何かを演じていただく、また力を見せていただくのは、どれだけ障害者の方々の力になるんだろう。そうやって逆にこれだけの助成をしてくださるのであるならば、県のスポーツ行政として、こういう方たちを例えれば、ある意味で年間契約等々をしながら、県のスポーツ大会等々なんかに出ていただいて、模範的なものを示してくださるとかという、そういう在り方が、本来の行政の在り方じゃないかと私は思っています。なので、この方たちにこうりますよ、ただ、その代わりにその方たちが神奈川県の障害者の方たちに、こんなにこれから努力していただきますという双方向にならなければ、これはもったいないだろうと思いますけれども、いかがですか。

スポーツ課長

今御指摘いただきました点、大変重要な視点というふうに考えております。やはり障害者スポーツを知っていただくという意味でいいますと、現役のアスリートの方と接するといったところが、子供たちにとっては一番大きなモチベーションにもなりますし、後天的に障害を負ってしまった方たちが、何かに目覚めていくというきっかけになっていくのかなというふうに思います。特にパラアスリートの多くの方は、後天的に障害を得て、そこからはい上がって今まで上り詰めるといったような、非常に貴重な体験をお持ちの方々だというふうに認識しておりますので、委員の御指摘のように、今後そういった視点でも、そういった方々が神奈川県の障害者スポーツの広報といいますか、PRマン、宣伝マンといいますか、そういったところでも活躍いただけるように、我々のほうでも検討させていただければというふうに考えております。

鈴木委員

パラスポーツの選手の方々もひっくるめて、何で私がこういう提案を今、突然させていただいたのかというと、きっと失礼ですが、やはり日々の生活をされていらっしゃる方にとて少しでも糧になればというような思いがありました。私としては行政の方々の配慮もいろいろあったと思います。やはり生活基盤がしっかりとした上でもって、なお一層活躍していただきたい。オリパラを見て多くの方に、特に障害者の方々に、ボッチャにしても、何にしても一気に広がりましたよね。私も先日小学校にお邪魔して、すごいものだなと思って見ておりました。あのようにになりたいと。それこそ障害をお持ちの方でも、あそこまで頑張れるんなら、私にもできないはずないじゃないか、もっと頑張らなきやいけないという先生の言葉がすごく印象的でした。どうか、逆に障害をお持ちの方々の御努力が、健常者の方々のモチベーションになる、だけれども、障

害者の、特にパラアスリートの方々の中についても、しっかりととした生活基盤等々をまた見ていただきながら、神奈川県のスポーツをまた進めていただくと、こういう流れの中でしっかりと対応していただくようにお願いいたしまして、質問を終わります。